西園雅集図をめぐって（上）

福本雅一

一

古来、文人の雅遊として、「竹林七賢」「蘭亭修禊」「桃李園遊」「香山九老」などが有名であるが、金谷や赤壁もそれに加えることができよう。更に北宋、人材は古今に超絶すといわれた元豊・元祐の間、蘇東坡を初めとする十六人の名士たちが、西園に集って一日の清遊を娯しんだ、いわゆる「西園雅集」は、共に参会者である李伯時の画、米元章の書に成る図として後世に伝わり、稀代の盛事として艶称されてきた。

しかしこの雅集は、多くの理由から事実ではないと考えられ、従来の研究者からも、そのことが指摘されたが、それらは単なる臆測の域を出ず、未だに確論を見ない。いまここに再びこの問題をとりあげ、事の不在を逐一論証し、併せて偽作の成立とその流伝についても論及したい。まず米芾撰の「図記」を紹介しよう。

西園雅集　　米芾『寶晉英光集』補遺

李伯時效唐小李將軍、爲著色泉石雲物艸木花竹、皆絶妙動人、而人物秀發、各肖其形、自有林下風味、無一點塵埃氣、不爲凡筆也、其烏帽黄道服、捉筆而書者、爲東坡先生[1]、仙桃巾紫裘而坐觀者、爲王晉[2]卿、幅巾青衣、據方机而凝竚者、爲丹陽蔡天啓[3]、捉荷而視者、爲李端[4]叔、後有女奴、雲鬟翠飾侍立、自然富貴風韻者、乃晉卿之家姫也、孤松盤鬱、上有凌霄纏絡、紅緑相間、下有大石案、陳設古器瑤琴、芭蕉圍繞、坐於石盤傍、道帽紫衣、右手倚石、左手執卷而觀書者、爲蘇子由[5]、團巾繭衣、手秉蕉箑而熟視者、爲黄魯直[6]、幅巾野褐、據横卷畫淵明歸去來者、爲李伯時[7]、披巾青服、撫肩而立者、爲晁无咎[8]、跪而捉石觀畫者、爲張文潛[9]、道巾青衣、按膝而俯視者、爲鄭靖老[10]、後有童子、執靈壽杖而立、二人坐於盤根古檜下、幅巾青衣、袖手側聽者、爲秦少游[11]、琴尾冠紫道服摘阮者、爲陳碧虚[12]、唐巾深衣、昂首而題石者、爲米元章[13]、幅巾袖手而仰視者、爲王仲至[14]、前者髯頭頑童、捧古研而立、後有綿石橋、竹徑繚繞於清溪深處、翠陰茂密中、有袈裟坐蒲團、而説無生論者、爲圓通大師[15]、傍有幅巾褐衣而諦聽者、爲劉巨[16]

濟、二人並坐於怪石之上、下有激湍、漾流於大溪之中、水石潺湲、風竹相呑、爐烟方裊、艸木自馨、人間清曠之樂、不過於此、嗟乎、洶湧於名利之域、而不知退者、豈易得此乎、自東坡而下、凡十有六人、皆以議論文章、博學辨識、英辭妙墨、好古多聞、雄豪絶俗之資、高僧羽流之傑、卓然高致、名動四夷、後之攬者、不獨圖畫之可觀、亦足彷彿其人耳

李伯時は唐の小李将軍に效い、著色の泉石雲物艸木花竹を為り、皆な絶妙にして人を動かす。而して人物は秀発し、各おの其の形に肖、自から林下の風味有りて、一点の塵埃の気無く、凡筆と為さざる也、其の烏帽・黄道服、筆を捉りて書する者を、東坡先生と為す、仙桃巾・紫裘して坐して観る者を、王晋卿と為す、幅巾青衣、方机に拠りて凝竚する者を、丹陽の蔡天啓と為す、荷を捉りて視る者を、李端叔と為す、後に女奴有り、雲鬟翠飾して侍立し、自然に富貴の風韻ある者は、乃ち晋卿の家姫也、孤松盤鬱し、上に凌霄纒絡し、紅緑相い間る有り、下に大石案有り、古器瑤琴を陳設し、芭蕉圍繞す、石盤の傍に坐し、道帽・紫衣、右手は石に倚り、左手は巻を執りて書を観る者を、蘇子由と為す、団巾・繭衣、手に蕉箑を秉りて熟視する者を、黄魯直と為す、幅巾・野褐、横巻に拠りて淵明の帰去来を画く者を、李伯時と為す、披巾・青服、肩を撫して立つ者を、晁无咎と為す。跪きて石に捉りて画を観る者を、張文潜と為す、道巾・青衣、膝を按じて俯視する者を、鄭靖老と為す、後に童子有り、霊壽杖を執りて立ち、二人は盤根の古檜の下に坐す、幅巾・青衣、手を袖にして側聴する者を、秦少游と為す、琴尾冠・紫道服、阮を摘む者を、陳碧虚と為す、唐巾・深衣、首を昂げて石に題する者を、米元章と為す、手を袖にして仰ぎ視る者を、王仲至と為す、前なる者は髯頭の頑童、古研を捧じて立ち、後に綿石橋有り、竹径は清渓の深処に繞繚し、翠陰茂密の中、袈裟して蒲団に坐し、而して無生論を説く者有り、円通大師と為す、傍に幅巾・褐衣にして諦聴する者有り、劉巨済と為す、二人並びて怪石の上に坐し、下に激湍有りて、大渓の中を漾流す、水石潺湲として、風竹相い呑み、炉烟方に裊として、草木自から馨る、人間清曠の楽みは、此に過ぎず、嗟乎、名利の域に洶湧し、而して退くを知らざる者は、豈に此を得易からん乎、東坡自り而下、凡そ十有六人、皆な議論文章、博学弁識、英辞妙墨、好古多聞を以ってす、雄豪絶俗の資、高僧羽流の傑、卓然たる高致、名は四夷を動かす、後の攬る者、独り図画の観る可きのみならず、亦た其の人を彷彿するに足る耳、

この図に登場する文人はおよそ十六名。彼らをこの文の紹介順ではなく、生卒順に並べかえて、その略伝を記しておく。生卒未詳の者は後に一括する。

1　圓通大師（袈裟をつけて蒲団に坐り、「無生論」を説く者）
釈懐賢（？―一〇八二）字は潜道、俗姓は何氏、温州永嘉（浙江）の人。天禧二年（一〇一八）、落髪受戒し、六十七歳で入寂。伝は秦観「円通禅師行状」、『補続高僧伝』巻七。

2　王晋卿（仙桃巾と紫衣で坐って〈東坡の書を〉観る者）
王詵（一〇三六―八九以後）字は晋卿、太原（山西）の出身であるが、都の汴（開封）に移り、英宗の女、魏国大長公主に尚した。駙馬都尉・利州防禦使となったが、党争に禍いされ、流謫されて歿した。

3　蘇東坡（烏帽で黄色い道士の服をつけ、筆をとって書く者）
蘇軾（一〇三六―一一〇一）字は子瞻、東坡居士と号し、四川眉山の人。嘉祐二年（一〇五七）の進士。神宗の時、新法党との争いに敗れて、地方に転出し、元豊二年（一〇七九）有名な筆禍事件「烏台詩案」によって、黄州団練副使に貶せられた。哲宗の時、召されて翰林学士となったが、再び党禍によって海南島に流され、徽宗の時、許されて帰朝する途上、常州で病歿した。父の蘇洵、弟の蘇轍と共に三蘇と称され、みな「唐宋八大家」の中に数えられる。往く所として可ならざるはなき古今の大天才で、詩文の他、書画にも巧みであった。著に『東坡集』他がある。伝は『宋史』巻三三八。王宗稷『東坡先生年譜』。

4　蘇子由（石盤の傍に坐り、道帽・紫衣をつけ、右手は石に、左手に巻物をとって書を観る者）
蘇轍（一〇三九―一一一二）字は子由、軾の弟で兄と同年の進士。尚書右丞から門下侍郎に進んだが、その間、党争に禍いされて地方に流されたこともあった。著に『欒城集』がある。伝は『宋史』巻三三九。

5　劉巨済（円通大師の傍に、幅巾・褐衣をつけて諦聴する者）
劉涇（一〇四三―一一〇〇）字は巨済、前渓と号し、簡州陽安の人。熙寧六年（一〇七三）の進士。王安石に認められ、元符の末年、官は職方郎中に至った。蘇軾・米芾と書画清遊の友で、墨竹を善くし、成都の太智院法堂にその松竹画壁があった。伝は『宋史』巻四四三。

6　黄魯直（団巾・繭衣をつけ、芭蕉扇を持って熟視する者）
黄庭堅（一〇四五―一一〇五）字は魯直、山谷また涪翁と号し、江西分寧の人、治平四年（一〇六七）の進士。北京国子監教授・秘書丞を歴任し、神宗実録検討官となったが、党禍のため、流謫地の宜州で歿した。秦観・張耒・晁補之と共に東坡の弟子で、蘇門四学士の一人。詩は険渋で江西詩派の祖。書は特に行草にすぐれた。著に『豫章先生文集』がある。伝は『宋史』巻四四四。

7　秦少游（幅巾・青衣で、手を袖にしてじっと聞き入る者）
秦観（一〇四九―一一〇〇）字は少游、また太虚、江蘇高郵の人。元豊八年（一〇八五）の進士。蘇軾の推薦で国史院編修官となったが、党籍によって左遷された。詩詞に巧みで、草書は東晋の風があると評される。著に『淮海集』がある。伝は『宋史』巻四四四。

8　李伯時（幅巾に野褐で、横巻に陶淵明の「帰去来図」を画く者）
李公麟（一〇四九―一一〇六）字は伯時、龍眠居士と号し、舒州の人。南唐の李昪の四世の孫。熙寧三年（一〇七〇）の進士。中書・門下の刪定官より朝奉郎に至った。詩に巧みで、鐘鼎尊彝などの古器の鑑別に長じた。山水は李思訓に似、仏像は呉道子に近いと評される。伝は『宋史』巻四四四。

9　米元章（唐巾・深衣、頭を昂げて石に書を題する者）
米芾（一〇五一―一一〇七）初名は黻、字は元章、鹿門居士・海岳外史などと号し襄陽・南宮とも呼ばれる。その祖は西域の米国の人。母の蔭によって、秘書省校書郎・太常博士・知無為軍・書画学博士・礼部員外郎を歴任した。奇矯な言動、極端な潔癖で、米顛と呼ばれたことは有名。書は特に王献之・褚遂良を慕い、諸家の萃を集めて一家を成し、画では横筆をかさね、墨の濃淡で山容を表わす、いわゆる米法山水を創始した。また鑑識に長じ、晋人の真蹟を集めて「宝晋斎」と名付けた。その著『山林集』は早く佚し

て伝わらず、遺文を集めた『宝晋英光集』や、書画に関する題跋などには、粗漏や重複が多い。伝は『宋史』巻四四四。蔡肇「米海岳墓志銘」。

10　晁無咎（披巾・青服で、肩を撫して立つ者）

晁補之（一〇五三―一一一〇）字は無咎、帰来子と号し、済州鉅野の人。元豊二年（一〇七九）の進士。官は著作佐郎より達・泗二州の知事に至った。蘇門四学士の一人で、文章は天成と称され、書画にも長じた。著に『雞肋集』がある。伝は『宋史』巻四四四。

11　張文潛（跪（ひざまづ）いて石に捉（よ）って画を観る者）

張耒（一〇五四―一一一四）字は文潛、柯山と号し、宛丘先生と称され、楚州淮陰の人。元祐元年（一〇八六）に秘書正字を拝したが、党籍に坐して失脚し、晩年は困窮のうちに歿した。蘇門四学士の一人。雄材あり、筆力は健勁、尤も騒詞に長じた。著に『張右史文集』がある。伝は『宋史』巻四四四。

12　蔡天啓（幅巾・青衣で、方几に拠り、じっと立っている者）

蔡肇（?―一一一九）字は天啓。江蘇丹陽の人。元豊二年（一〇七九）の進士。徽宗の時、吏部員外郎・中書舎人・明州知州を歴任した。山水人物に巧みで、著に『丹陽集』がある。なお彼は米芾が秘書省校書郎であった時、都で会ったと思われ、詩文の応酬があり、またその「墓志銘」も書いている。伝は『宋史』巻四四四。

13　李端叔（荷（はす）の花をとって見る者）

李元儀（生卒不詳）字は端叔、姑溪居士と号し、山東無棣の人。元豊の進士。蘇軾に従って定州幕府にあり、枢密院編修官を経て、徽宗の時、朝請大夫で終った。文に長じ、尺牘に巧みで、蘇軾は「尺筆三昧に入る」と評している。著に『姑溪集』がある。伝は『宋史』巻三四四。

14　鄭靖老　未詳。

15　陳碧虚（琴尾冠・紫道服で、阮咸を奏する者）

陳景元（生卒未詳）字は太虚、真靖・碧虚子と号し、山東南城の人。道士で右街副道籙となり、真人の称を賜った。詩書画みな清婉と評される。伝は『宣和画譜』巻六、『宋詩紀事』巻九。

16　王仲至（手を袖にして仰ぎ見る者）

王欽臣（生卒未詳）字は仲至、河南宋城の人で王洙の子。哲宗の時、集賢殿修撰となった。文を作ること多く、あまねく名士と交った。著に『広諷味集』がある。伝は『宋史』巻二九四。

二

西園という名の庭園は、歴代にそれがある。早くは『後漢書』霊帝紀に、「中平五年（一八八）八月、初めて西園八校尉を置く」とあり、次いで『宋書』符瑞志に、「白燕　司徒府の西園に集る」といい、また『北史』元景晏伝に、「孝昭は嘗って功臣に西園の宴を与う」という。これらの庭園は、単に宮中の西という位置を示した普通名詞であったものが、次第に個有名詞に転化したものであろう。

思うに宴遊は、午後から夜に及ぶのが通例で、そのため長く陽の射す西園で行なわれるのであろう。宮中でも、大きな庭園はすべて宮城の西に設けられ、北京の西苑に至る歴代の首都に於いても、そのようである。魏より唐までの若干の詩句を引いておく。

魏文帝（曹丕）「芙蓉池作」

乗輦夜行遊　逍遙歩西園

曹植「公讌詩」
清夜△遊西園　飛蓋相追隨
王粲「雑詩」
日暮△遊西園　冀寫憂思情
梁元帝「去丹陽尹荆州詩」
終朝陪北閣　清夜△侍西園
庾肩吾「暮遊山水應令詩」
餘春屬清夜△　西園恣遊歴
孫萬壽「和張丞奉詔於江都望京口詩」
尚想西園夕△　猶懐北固時
張正見「薄帷鑒明月詩」
豈及西園夜△　長隨飛蓋遊
謝偃「樂府新歌應教詩」
上客莫畏斜光晩△　自有西園明月輪
駱賓王「秋月詩」
西園徒目賞　南飛終未安
胡曽「西園詩」
月滿西園夜△未央　金風不動鄴天凉

また時代はかなり隔たるが、明初の高啓に、太祖朱元璋の荒淫を諷したとして、後年の刑死の因となった、次の「宮女図」七絶がある。

女奴扶醉踏蒼苔　明月西園侍宴回
小犬隔花空吠影　夜深宮禁有誰來

これらの例を通じて、西園と呼ばれる庭園は、宮中を初めとして、最も通俗的な庭園であり、そこではしばしば遊宴が夜に及んで催される、という事実が明らかになった。それでは「西園雅集図」のそれは、北宋時代、果してどこに存在したのであろう。

三

官職閲歴を異にする十六人の名士たちが、一処に会し得ると考えられる場所は、当時恐らく二ケ所にすぎない。即ち東都汴京(開封)と西京洛陽である。後者に関しては、幸いにも李格非に『洛陽名園記』の専著がのこる。彼は女詞人李清照（易安）の父として知られるが、『宋史』[1]本伝に、「文章を以って知を蘇軾に受く」とあり、また党籍によって罷免され、六十一歳で卒したとあるから、蘇の後輩で蘇門の六君子と同世代。つまりここに最もふさわしい証人といえよう。『洛陽名園記』の開巻第二は「董氏西園」と題し、次のように述べる。

董氏の西園は、亭台花木、行列を成さず、区処周旋し、景物は歳に増し、月に成る所を葺す、南門自り入れば、堂有りて相い望む者三、稍や西すれば、一堂は大地の間に在り、小橋を逾ゆれば、高台一有り、又た西の一堂、竹は之を環る、中に石芙蓉有り、水は其の花間自り湧出す、軒牕を開けば、四面甚だ蔽われ、盛夏の燠暑も、日を畏るを見ず、清風忽ちに来り、留りて去らず、幽禽静かに鳴き、各おの得意を誇る、此の山林の景にして、而も洛陽城中、遂に之を此に得たり、小路は池に抵り、池の南に堂有り、高亭に面す、堂は宏大ならずと雖も、而も屈曲して甚だ邃し、游

ぶ者も此に至れば、往々にして相い失う、豈に前世の所謂迷楼なる者の類なる也、元祐中、留守有り、此に宴集するを喜ぶ、

これに続いて「董氏東園」の紹介があり、その首に、

董氏は財を以って洛陽に雄たるも、元豊中、県官の銭糧を少き、尽く籍入せらる、

というが、董氏の名を記さず、詳細は不明である。しかしこの「董氏西園」の描写は、亭台はともかく、小橋叢竹、細流幽径等の景物は、かなり「西園雅集図」のそれと対応する。のみならず、更に重要なことは、最後の一句、即ち「元祐中、留守有り、此に宴集するを喜ぶ」という記事である。元豊・元祐は、後世の諸家が、雅集の開催を比定した時期に当り、留守は恐らく、元豊三年より元祐初年に至る間、判河南であった文彦博であろう。『宋史』[2]本伝にいう。

彦博は貴を窮め富を極むと雖も、而も平居に物に接し下に謙し、徳を尊び善を楽しみ、及ばざるを恐るが如し、其の洛に在る也、洛人邵雍・程顥兄弟、皆な道を以って自から重んじ、之に賓接すること布衣の交の如し、富弼・司馬光等十三人と、白居易が九老会の故事を用い、置酒して詩を賦し相い楽しむ、歯を序して官を序せず、堂を為り、像を其の中に絵き、之を「洛陽耆英会」と謂う、好事者之を慕わざるは莫し、

この「洛陽耆英会」は、司馬光の序[3]によれば、この時、韓琦の第に集ったのは十一人、その図は妙覚僧舎に絵かれたという。この耆英会は史実に徴し得るが、西園雅集の方は残念なことに、洛陽においては、その痕跡さえ求めることができない。ただ注意すべきは、耆英会はその名の如く、老名士たちの君子の交わりであり、西園雅集が壮年の文人の集いである点で、その参加者にはおのずから截然たる区別がある。更に補足すれば、古昔の洛陽には、次の二西園があったことが『古今図書集成』[4]によって知られる。

西苑は城外に在り、隋の煬帝築く、週迴二百里、台観宮殿は華麗を極む、

西園は府城の西に在り、漢の桓霊（両帝）が官を売りし地、

それでは都の汴京には、西園は存在しなかったのであろうか。地志の類にその名を記すものなく、宋孟元老『東京夢華録』・明李濂『汴京遺跡志』・清周城『宋東京考』等の専著にも、その名を見出すことができない。ただ『汴京遺跡志』[5]の「宜春苑」の割注に、「固子門外に在り、宋人は西御園と号す」という一節があり、『宋東京考』[6]もこれを引いている。ところが金の元好問には、「西園」[7]と題する七古があり、施国祁はその注に、

不見西園風露秋　「探花詞」巻六

數日西園看車馬　「汴梁除夜」巻一〇

扇頭喚起西園夢　「扇頭詩」巻一二

惆帳西園是舊游　「石裕卿」巻一四

の四例を挙げ、「此れ汴京に在る者」と記している。また最近の賀新輝『元好問詩詞集』[8]では、「西園は北京の旧都汴京附近に在り、当時の名園である」と述べ、施注の例を挙げた後、「皆な汴京の西園を指す、宋の徽宗は曽って大量の人力物力を浪費し、〈寿山艮岳〉を建て、江南地方の名花怪石を汴京に運び、園林を装点したので、京都百里の内に、名園は遍く布いた」と説いている。

元好問（一一九〇―一二五七）の詩句を信ずれば、汴に西園が存在したことは確実であるが、彼は元豊・元祐を去ること約百五十年以後

が、その活躍の時期と考えられることから、その間、北宋の名園の一つが、西園と改称されたり、またその名の庭園が新たに築かれることは、充分にある得る。しかしこれを以って「西園雅集」の西園そのものである、と短絡することは説得力を欠く。

それでは元豊・元祐に先行する北宋の西園はどうか。

宋祁「清明日集西園」七律（『景文集』巻一七）

韓維「西園」五古（『南陽集』巻二）

欧陽修「西園石榴盛開」七律（『欧陽文忠公集』巻一二）

等に「西園」の名が見えるが、すべてその場所を特定することができず、従って「西園雅集」と連絡はおぼつかない。

最後に、ここに登場する十六人の詩文に、「西園」の二字を発見することはできないのか、このような場合に便利な『集注分類東坡詩』巻十・園林を一瞥しよう。そこには、

「春歩西園見寄」七絶

「滕県時同年西園」五古

「三月二十日開園」七絶三首、其二に「西園牡鑰夜沈沈」

等の例が見られ、また張耒『柯山集』巻二三にも、

「西園風雨雑花謝」七絶

「西園」七絶

の二例が認められる。しかし内容はいずれもこの雅集に言及せず、関連は認められない。

四

当時に喧伝されたに違いないこの雅集について、それではそれ以後の文献はどのように受けとめていたのであろうか。

陳高華『宋遼金画家史料』[9]は、宋より元に至る文献中から、当該画家に関する資料を網羅輯録しようと試みた労作であるが、いま論証を決定的にするために、李公麟について、彼と同時代の人々の証言を、煩を厭わず列挙してみよう。

1 『宋史』巻四四四・文苑伝・李公麟

2 『宣和画譜』巻七・人物三

3 『図絵宝鑑』巻三・宋

4 「次韵蘇子瞻題李公麟画馬図」七古（『蘇魏公文集』巻五）

5 「和題李公麟陽関図」七絶二首（『同右巻一一）

6 「次韵子由書李伯時所蔵韓幹馬」七古（『東坡集』巻一六）

7 「和王晋卿題李伯時画馬」五律（同右巻一七）

8 「戯書李伯時御馬好頭赤」七律（同右巻一七）

9 「書林次中所得李伯時帰去来陽関二図後」七絶二首（同右巻一七）

10 「題李伯時趙景仁琴鶴図」七絶二首（同右巻一七）

11 「黄庭経賛并叙」七古（同右巻二〇）

12 「書李伯時山荘図後」（同右巻二三）

13 「次韵呉伝正枯木歌」七古（『東坡後集』巻三）

14 「李伯時画其弟亮功旧宅図」七律（同右巻七）

15 「三馬図賛并引」（同右巻九）

16 「次韵魯直書伯時画王摩詰」五律（『東坡続集』巻一）

17 「題李伯時淵明東籬図」五古（同右巻一）

18 「与李端叔」（同右巻六）

19 「咏李伯時摹韓幹三馬、次蘇子由韵、簡伯時、兼寄李徳素」七古（『豫章黄先生文集』巻二）

20 「次韵子瞻和子由観韓幹馬因論伯時画天馬」七古（同右巻二）
21 「次韵子瞻咏好頭赤図」七律（同右巻三）
22 「咏伯時虎脊天馬図」五律（同右巻三）
23 「咏伯時象龍図」五律（同右巻三）
24 「観伯時画馬」七古（同右巻三）
25 「次韵子瞻、子由題憩寂図」七絶二首（同右巻五）
26 「題伯時画揩蛬虎」七絶（同右巻五）
27 「題伯時画観魚僧」七絶（同右巻五）
28 「題伯時画頓塵馬」七絶（同右巻五）
29 「題伯時厳子陵釣灘」七絶（同右巻五）
30 「写真自賛」六首（同右巻一四）
31 「題摹燕郭尚父図」（同右巻二七）
32 「書王荆公騎驢図」（同右巻二七）
33 「題李伯時憩寂図」（同右巻二七）
34 「題李伯時画天女」（同右巻二七）
35 「題画娘子軍胡騎後」（同右巻二七）
36 「題陽関図」七絶二首（『山谷外集』巻一二）
37 「伯時彭蠡春牧図」七古（『山谷別集』巻一）
38 「題伯時馬」七律（同右巻一）
39 「書伯時陽関図草後」（同右巻八）
40 「観音菩薩画賛」（『後山先生集』巻一七）
41 「子瞻与李公麟宣徳共画翠石古木、老僧謂之憩寂図、題其後」七絶（『欒城集』巻一五）
42 「問蔡肇求李公麟画観音徳雲」五律（同右巻一五）
43 「李公麟陽関図」七絶二首（同右巻一六）
44 「題李公麟山荘図二十首并叙」五絶（同右巻一六）
45 「自作伝神賛」（『姑溪居士文集』巻一二）
46 「李伯時馬賛」（同右巻一二）
47 「李伯時姑溪濯足図賛」（同右巻一四）
48 「李伯時画馬賛」（同右巻一四）
49 「京兆安汾叟赴辟臨洮幕府、南舒李君自画陽関図、并詩以送行、浮休居士為継其後」七古（『画墁録』巻一）
50 「次韻魯直試院贈奉議李伯時画詩」七古（『雞肋集』巻一二）
51 「題伯時画」七絶（同右巻二二）
52 「白蓮社図記」（同右巻三〇）
53 「西園雅集図記」（『宝晋英光集』補遺）
54 「李公麟病右手三年云々」（『画史』）
55 「李伯時画弥陀像賛」（『石門文字禅』巻一八）
56 「酔僧賛」（同右巻一九）
57 「依韻和李元中兼寄伯時」七律二首（『陶山集』巻二）
58 「書王荆公游鍾山図後」（同右巻一一）

これら文集名から作者とその生卒を記せば、次のようになる。

4—5　蘇頌（一〇二〇—一一〇一）
6—18　蘇軾（一〇三六—一一〇一）
19—39　黄庭堅（一〇四五—一一〇五）
40　陳師道（一〇五三—一一〇一）
41—44　蘇轍（一〇三九—一一一二）
45—48　李之儀（元豊の進士）
49　張舜民（治平二年進士）

50—52　晁補之（一〇五三—一一一〇）
53—54　米芾（一〇五一—一一〇七）
54—55　釈恵洪（一〇七一—一一二八）
56—57　陸佃（熙寧三年進士）

生卒未詳の者もほぼ李公麟（一〇四九—一一〇六）と同時代と考えられるが、注目すべきはこれら十一名中、半数の五名が、「西園雅集」の参会者である。それが米芾の「西園雅集図記」を除いても、約四十余に及ぶ李公麟への詩文が、どれ一つとして「西園雅集」に言及していないのは、一体どうしたことであろう。

李公麟に対しては、ここに挙げたほぼ同時代の発言に続いて、明初の宋濂に至る、実に二百余の、従って合計すれば二百六十の記事が集められているにも拘らず、「西園雅集」に触れるのは、今挙げた米芾と、後に論ずる袁桷「題李龍眠雅集図」のただ二編である。

また（2）の『宣和画譜』は、画家の伝記に附して、御府所蔵画のリストを掲げるが、李公麟の百七点の収集中にも、「西園雅集図」と題するものは見当らない。

それでは、福開森（フォーガスン）の『歴代著録画目』ではどうであろうか。約八百五十に達する李公麟の画目中、「西園雅集図」を著録するものは、次の十二種の文献にすぎず、しかもこれらは明中葉の都穆（一四五八—一五二五）より始まり、宋元の記録に遡ることはできない。

一　明都穆『鉄網珊瑚』巻五
二　〃　『寓意編』巻七
三　文嘉『鈐山堂書画記』
四　〃　『天水冰山録』一九一・二二九
五　王世貞『弇州山人四部続稿』巻一七一
六　陳継儒『妮古録』巻一
七　張丑『清河書画舫』巻七・巻八
八　汪砢玉『珊瑚網画録』巻二三
九　卞永誉『式古堂画攷』巻二
一〇　清　『佩文斎画譜』巻八三・巻八八・巻一〇〇
一一　『石渠宝笈初編』巻三四
一二　李調元『諸家蔵画簿』巻九・巻一〇

五

絵画の方面からする探索は、こうして全く収穫のないことが判明した。宋朝一代の不朽の盛事とさえ言うことのできる「西園雅集」に関して、当時の記録がすべて沈黙したままであり、参集者の側にも何の言及もないとすれば、それでは孤立した米芾の「西園雅集図記」は、どのように考えればよいのであろう。

米芾にはもと、『山林集』一百巻[10]があったというが、南渡の後に散佚して、今は南宋の岳珂が編定した『宝晋英光集』八巻を存するのみであり、同記はその補遺に収められている。『宝晋英光集』自体、後に各法帖に見える米芾の書を多く収録したといわれるが、これが補遺に入れられているということは、最後に附加されたことを意味し、恐らく次に論ずる諸家の記事によって補入されたと思われる。それ故、米芾の「西園雅集図記」は除かねばならず、従ってこれに対する最初の言及は、元の袁桷（一二六六—一三二七）、或いは黄溍（一二七七—一三五七）のそれで、以下に諸家が比定するように、この図が

元祐年間（一〇八六―九三）に作られたとすれば、二百数十年が経過した後のことになる。なお袁と黄との年齢差は十一歳であるが、発言の先後は断定することができない。まず前者の「題李龍眠雅集図」[11]を引こう。

龍眠旧と雅集図を作るは、元豊の間に在り、時に于いて、米元章・劉巨済の諸賢、皆な預る、蓋し王晋卿都尉の家に宴して作る所也、嗣ぎて後、詩禍興り、京師の侯邸、皆な門を閉して客を謝し、都尉は竟に憂いを以って死し、復た雅集有らず矣、元祐の更政に、蘇文忠公（軾）は中書舎人と為り、黄太史（庭堅）は史館に入り、張右史（耒）晁河中（補之）は正字と為り、秦少游は品秩最下なるを以って、亦に黄本の書籍を校す、未だ幾ばくならず、晁は憂いを以って去り、又た未だ幾ばくならずして、趙挺之は蘇公を論じ、少游・魯直も同一に疏否せらる、則ち晁も亦た疏中に在り矣、噫、元二（元豊・元祐）の際、号して翰和と為す、党論の萌すは、蓋し已に兆せり、朕、良に悲しむ可き也、此の図は蓋し元祐の初めに作らる、龍眠は京に在りて後、貢挙に預り、斯の時に集まるは、則ち孰か之が主と為る歟と、曰く、此れ安定郡王趙徳麟の集也、徳麟は力めて王晋卿・侯鯖の盛を慕い、題詠に見ゆ、文潜は飲を嗜み、樽罍、几に満つる者は、其の実也、少游は凝然、其の小秦王を思うの意有る乎、魯直は家妓に遇う毎に、輙ち裙帯に書す、今乃ち巻に題する者は、猶お故態のごとき也、東坡公の精神は凌厲、筆墨に見ゆ、而して門下の二客を待つは、蓋し未だ嘗って此を以って彼に易えず、（後略）

この記事は要件を次の四点に絞ることができよう。即ち、

一　龍眠の「雅集図」は、王晋卿での宴遊を元豊の頃に描いたものである。

二　詩禍によって、名士たちの交遊は行なわれなくなった。

三　元祐の更政（旧法党の復活）によって、蘇軾・黄庭堅・張耒・晁補之・秦観は、当時みな中央に集ったが、趙挺之等の反撃により、次第に朝を去った。

四　この図はこの時、趙徳麟の邸での雅集を絵いたものである。

文中の詩禍とは、蘇軾の筆禍事件「烏台詩案」を指す。彼が作った新法批判の詩が、当局の忌憚に触れ、天子を誹謗したものとして告発審問された。百日の獄中生活の後、彼は死を免れて黄州へ流されることになった。元豊二年のことで、烏台は御史台の別称である。

趙徳麟は未詳。太宗の弟魏王廷美の諸子は、徳の字を共有するが、徳麟の名は見えず、また時代も一致しない。

袁桷がこれらの事実を、何に依って書きとめたのかは明らかではないが、最も重要な、この雅集が二度、王晋卿と趙徳麟の各邸で行なわれたことを、どうして知り得たのであろう。その事に穿鑿する前に、ほぼ同時期の他の証言をまず引用しておこう。黄溍のそれは「述古堂記」[12]と題しているが、内容は正に「西園雅集図記」で、後の諸記録の母胎となったものと考えられる。

呉郡の繆仲素は、好古博雅の士也、平生の嗜む所、惟だ古器物のみ、卒然として之に遇わば、輙ち購うに重貲を以ってし、並べて一堂の上に寘く、其の目は若干、宝用する所の者に、宋の内府故蔵の紹興丁巳に邵諤が進むる所の述古図円研有り、述古を以って其の堂に名づくるに因り、而して予に求めて之を記せしむ、述古図は、李伯時が唐の小李将軍、著色を用いて雲泉花木及び一時の人物を写せるに本づく、鄭天民先覚が為る所の記を案ずるに、勘

書台に坐し、筆を捉りて書する者を、東坡先生と為す、喜び観る者を、王晋卿と為す、椅に凭れ立ちて視る者を、張文潜と為す、方几を按じて凝竚する者を、蔡天啓と為す、盤石上に坐し、頤を支え巻を執りて画を観る者を、蘇子由と為す、蕉扇を執りて熟視する者を、黄魯直と為す、肩に凭れて偶語する者を、陳無己と為す、横巻に拠りて帰去来図を画く者を、李伯時と為す、膝を按じて旁観する者を、李端叔と為す、膝を跪きて俯視する者を、晁無咎と為す、古檜の下に坐し、阮を擘く者を、陳碧虚と為す、手を袖にして側聴する者を、秦少游と為す、首を昂げて石に題する者を、米元章と為す、竚立して観る者を、王仲至と為す、蒲団に坐して無生論を説く者を、圓通大師と為す、偶坐して諦観する者を、劉巨済と為す、凡そ幅巾を著する者は十有一人、烏帽の者二人、而して其の一を道帽と為す、僊桃巾・琴尾冠なる者各一人、深衣・紫衣・褐衣を衣る者各二人、青衣の者四人、黄衣の者三人、而して其の一を道服と為す、繭衣・紫氅・黲衣は各一人、一童は霊寿杖を執り、一童は古研を捧じ、両女奴は雲鬟翠飾、則ち王晋卿の家姫也、石床・錦褥・玉扈・瑤琴は、次を以って陳列し、大谿峭壁、怪石淙流、曲径危橋は、左右に映帯し、松竹蘭蕙、紅蕉紫葳は、蔽翳聯絡す、天民又た謂う、羽流有り、名は四夷を動かし、千古に師表たるも、伯時は偶たま未だ之に及ばず、間に寓意に乗じ、絵きて図を為り、以って好事の玩に資す、其の指す所は誰と為すかを知る莫し、記は政和甲午後、二十又三年に作らる、諤は乃ち研を以って進む、研は蓋し端溪の紫石、其の形は正円、其の中を隆くして以って墨を受け、其の外を環らして以って水と為す、委して旁に茲の図を刻す、其の物采は弁ず可らずと雖も、而も服飾位置は、猶お彷彿として覩る可し、所謂述古図円研也（後略）

袁桷の場合と同様に要約すれば、

一　呉郡の繆仲素は古器物を好み、その収集の中に、宋内府旧蔵の「述古図研」があった。それは紹興丁巳に邵諤という者が献上したものである。

二　研に刻された図は、李公麟が唐の小李将軍の著色「雲泉花木人物図」を摸写したものに本づく。

三　その図には鄭天民の記が附され、十六名の人物を蘇東坡等、当時の名士に擬定し、各人物の描写は米芾の「西園雅集図記」に似る。

四　この記は政和甲午の二十三年後に作られ、また研は正円形で旁にこの図を刻している。

明末の銭謙益に「保硯斎記」[13]の一文があり、この「述古図研」がよく知られた故事であったことを物語っている。そこで銭は、「吾が邑の繆侃仲素」と記しているが、繆侃は繆貞の誤り。『書史会要』[14]に、「繆貞、字は仲素、姑蘇の人、篆書は張有を宗とす」とあるが、ここに姑蘇（蘇州）の人というのもまた誤り。高啓「烏目山樵賛」[15]に、

繆貞　字は仲素、虞仲の邦、游之里と言う、山長く水深く、此の徳士を生む、其の外は臞せたりと雖も、中に道の腴なるを含む、詩を誦し書を読み、終焉には娛しむに在り（△韻字）

とあることから、彼が虞仲、即ち常熟の人と知れる。

紹興丁巳は七年（一一三七）、靖康の難に続く宋の南渡より十一年後に当る。邵諤は未詳。鄭天民先覚は鄭知微。字は先覚で、天民というのは或いは別名か。『図絵宝鑑』補遺[16]に、「鄭天民、字は先覚、宣和中、郎官と為り、山水は巨然を師とす」というのが、唯一の資料

である。政和甲午は四年（一一一四）で、その二十三年後は南宋の最初の年、即ち紹興七年（一一三七）に当る。

以上で黄溍の記事の背景を説明したことになるが、これに拠れば、先の要約を次のように改めることができよう。

一　李公麟が唐の小李将軍の描いた著色の「雲泉花木人物図」を摸写し、それを「述古図」と呼んだ。

二　その中に描かれていた人物を、鄭天民が蘇東坡以下の十六人に試みに擬したが、それはちょうど南渡の喪乱に続く時であった。

三　国内がようやく安定した頃、邵諤という者が、その図を端溪円硯に刻して朝廷に献上した。

四　それを元末の繆貞が入手し、述古堂を建て、黄溍に記を依頼した。

思うに鄭天民が、李公麟の「述古図」中の人物を、元豊・元祐両期の諸文士に擬定したのは、靖康の難によって社稷の覆滅に遭逢し、徽宗・欽宗父子は楚囚となって北に去り、累代の文物はすべて醜虜の手に落ち、都城の繁華もために一旦に銷尽したのを知り、また満目の風光ことごとく悽涼と化したことを悲惋した時、翻ってかつての太平隆昌の時を想起し、それをせめてこの図に托して、後世に伝えようと願ったからに違いない。彼がそこに政和後二十三年と書きつけたのは、北宋の滅亡を忌み憚ったために外ならない。

先に邵諤がこの「述古図」を端硯に刻したと予想したが、ここに至れば、それ以前すでに刻されていたものを、彼がたまたま求めて献上した、と考える方がより自然であろう。そしてこの「述古図」は、新たに金の版図に組みこまれた中原に残って流伝した。南宋に記録がないのはそのためで、元の宇内混一後に、中国の文人は再びそれを親しく目睹することができたのである。それ故、元の袁桷と黄溍の二家より早く、金の劉祖謙に「雅集図」七絶がある。[17] 詩題に西園と特定していないが、内容から見て、これに違いない。

翠雀翩翩野鶴孤　翠雀翩々として　野鶴孤なり
玉京人物會仙圖　玉京の人物　会仙の図
後來且莫輕題品　後来且く軽がろしく題品する莫かれ
席上揮毫有大蘇　席上揮毫するは　大蘇有り

大蘇はもちろん弟の蘇轍に対して蘇軾をいう。劉祖謙については詳らかにするを得ない。

この詩を載せるのは『歴代題画詩類』[18]であるが、そこには続いて元の三家の詩を採録している。

題西園燕集圖　元于立

文章在世如元氣　文章の世に在るは元気の如く
人物盛衰同一致　人物の盛衰　同じく一致す
開圖使我三歎息　図を開けば我をして三たび歎息せ使む
乃知作者遺深意　乃ち知る　作者の深意を遺せるを
名園蕭瑟懸古秋　名園　蕭瑟　古秋に懸り
白沙翠竹涵清流　白沙　翠竹　清流に涵す
豈無尊俎寄幽賞　豈に尊俎の幽賞に寄する無からんや
況有文字能相酬　況んや文字の能く相い酬ゆる有るをや
花前美人美如玉　花前の美人　美しきこと玉の如く
翠痕冷透冰綃緑　翠痕冷やかに透る冰綃緑
長帽先生正揮洒　長帽先生　正に揮洒し
何處阮咸新度曲　何れの処の阮咸か新たに曲を度せる
法書名畫總游藝　法書　名画　総て游芸

説有談空聊遠俗　説けば空を談ずる有り聊か俗に遠ざかる
當時風流數君子　当時の風流　数君子
千古何人繼高躅　千古　何人か高躅を継げる
君不見金谷荒園無草木　君見ずや　金谷の荒園草木無く
又不見姑蘇空臺走麋鹿　又た見ずや　姑蘇の空台麋鹿走るを
彼處富貴等塵土　彼の処の富貴　塵土に等しく
何如斯人斯畫傳千古　斯の人　斯の画の千古に伝わるに何如ぞ

題西園雅集圖

元　姚文煥

宋家全盛日　宋家　全盛の日
戚里肅高風　戚里　高風粛たり
四海才華萃　四海　才華萃り
西園爽氣濃　西園　爽気濃し
衣冠名教異　衣冠　名教異なるも
興趣一時同　興趣　一時同じ
雅好隨賓客　雅好　賓客を隨え
風流見主翁　風流　主翁を見る
珍藏出古物　珍藏　古物を出し
能事競新功　能事　新功を競う
離席高譚永　席を離れて　高譚永く
行厨異味重　厨を行なえば　異味重し
臺池迷遠近　台池　遠近に迷い
杖屨任西東　杖屨　西東に任す
竹色仍多碧　竹色　仍お碧多く
蕉花也自紅　蕉花　也た自から紅なり
文章關世道　文章　世道に関り
富貴感秋蓬　富貴　秋蓬に感ず
良會難爲數　良会　数うるを為し難く
清驩未易窮　清驩　未だ窮め易からず
蘭亭祓禊事　蘭亭　祓禊の事
金谷綺羅叢　金谷　綺羅の叢
回首俱陳迹　首を回せば　俱に陳迹
君看圖畫中　君よ看よ　図画の中

題顧進道所藏西園雅集圖

元　張天英

西園緬邈天中開　西園緬邈として天中に開き
仙山淥池異蓬萊　仙山淥池　蓬萊に異なる
翠葆翛翛拂花去　翠葆翛々として花を払いて去り
傳迎都尉朝天回　伝迎せる都尉　天に朝して回る
寶繪前榮日初旭　宝絵　前に栄え　日初め旭し
一時冠蓋如雲來　一時の冠蓋　雲の如く来る
玉案離離發天藻　玉案離々として　天藻を発し
瑤姫催獻流霞杯　瑤姫　催し献ず　流霞杯
松下羽衣絃欲語　松下の羽衣　絃は語らんと欲し
煙霓搖豔金銀臺　煙霓搖艶す　金銀台
興酣飛筆灑元氣　興酣に筆を飛ばせ元気を灑ぎ
巖屏鼎鼎寒欲摧　巖屏鼎鼎として寒く摧けんと欲す
幽賞羅衆賓　幽賞　衆賓を羅ね
石牀浄如拭　石牀　浄きこと拭うが如し
想像栗里人　想像す　栗里の人

青林照顔色　青林　顔色を照らす
緇衣者誰子　緇衣する者は誰が子ぞ
入竹坐深默　竹に入りて坐して深く默す
眼中綺麗何足珍　眼中の綺麗　何ぞ珍とするに足らん
回首秋風化棘榛　回首すれば　秋風に棘榛と化す
君不見金谷澗龍鱗池　君見ずや　金谷澗　龍鱗池
木妖石怪　木妖　石怪
中藏禍機　中に禍機を蔵し
呉歌楚舞　呉歌　楚舞
顧影悽悲　影を顧みれば悽悲
丈夫不愛士　丈夫　士を愛せずして
富貴空爾爲　富貴　空しく爾為すや
徒勞玩物志　徒に玩物の志を労すれば
但爲後人嗤　但だ後人の嗤いと為る
何如巣居杯飲得眞意　巣居の杯飲　真意を得て
年年歳歳羲農時　年々歳々　羲農の時なるに何如ぞや

〈注〉
1 『宋史』巻四四四・文苑六、李格非伝
2 『宋史』巻三一三・文彦博伝
3 司馬光『温国文正司馬公集』巻六五
4 『古今図書集成』職方典・河南府部・古蹟考一
5 『汴京遺跡志』巻八・苑
6 『宋東京考』巻一一・苑
7 元好問『元遺山集』巻二
8 賀新輝『元好問詩詞集』（北京・中華展望出版、一九八七・二）
9 陳高華『宋遼金画家史料』・李公麟（北京・文物出版、一九八四・三）
10 『四庫全書総目』巻一五四・集部・別集類七・宝晋英光集
11 袁桷『清容居士集』巻四七
12 黄溍『金華黄先生文集』巻一四
13 銭謙益『初学集』巻四三
14 陶宗儀『書史会要』巻七
15 高啓『凫藻集』巻四
16 夏文彦『図絵宝鑑』補遺・宋
17 御定『歴代題画詩類』巻四一
18 同右